

場所から考える高齢者の地域居住

第2回 「ひがしまち街角広場」が作り変える地域

Ibasho Japan 副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター 事務局長 田中 康裕

1. 「まち」と居場所

大阪府千里ニュータウンの新千里東町に開かれた「ひがしまち街角広場」は、「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」を目指して開かれた「まちの居場所」である(写真1)。2001年9月30日のオープンから、17年以上にわたって地域住民がボランティアのスタッフとして運営を担い、補助金に依存しない運営を続けてきた。前回「ひがしまち街角広場」は、属性、所属、参加、交流、目的といった枠組みに収まらないことが許容されると同時に、地域を作りあげる当事者になれる場所として、一人ひとりの地域居住を支えていることをみた(田中, 2018)。今回はやや視野を広げて、「ひがしまち街角広場」と地域との関わりをみていきたい。

「ひがしまち街角広場」オープンのきっかけは、2000年に新千里東町が建設省(現・国土交通省)の「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクト地区に選定されたことである。当時の千里ニュータウンは、まち開きから約40年が経過し「人口の減少と高齢化、住宅・施設の老朽

化、近隣商業地区の低迷などの問題を抱え、『今やニュータウンはオールドタウンである』と言われる」こともあった(山本ほか, 2001)^[1]。新千里東町も例外ではない。人口は減少し(図1)、最大で1,400人以上いた小学校の児童は約200人にま

で減少していた(図2)。近隣センターには、空き店舗が目立つようになっていた。新千里東町が「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクト地区に選定されたのは、「急激な少子・高齢化、小売店舗の撤退、施設の朽化の進行等の課題に対

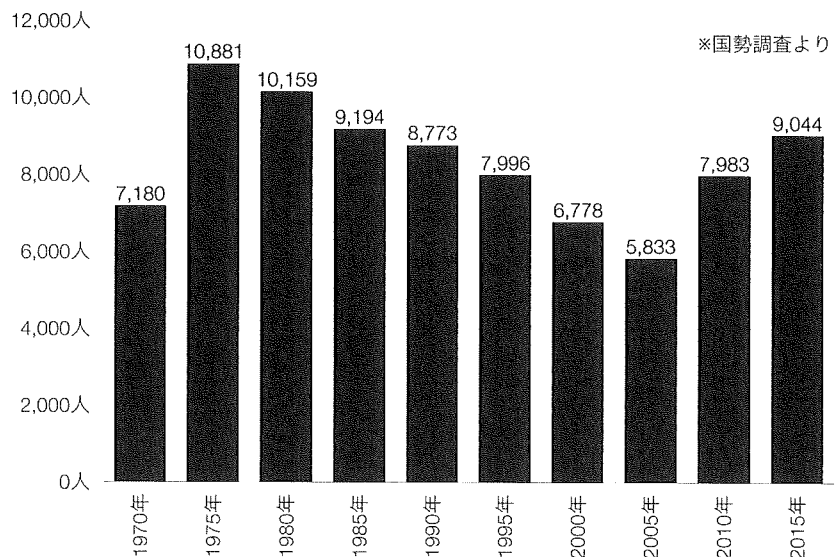


図1 新千里東町の人口推移

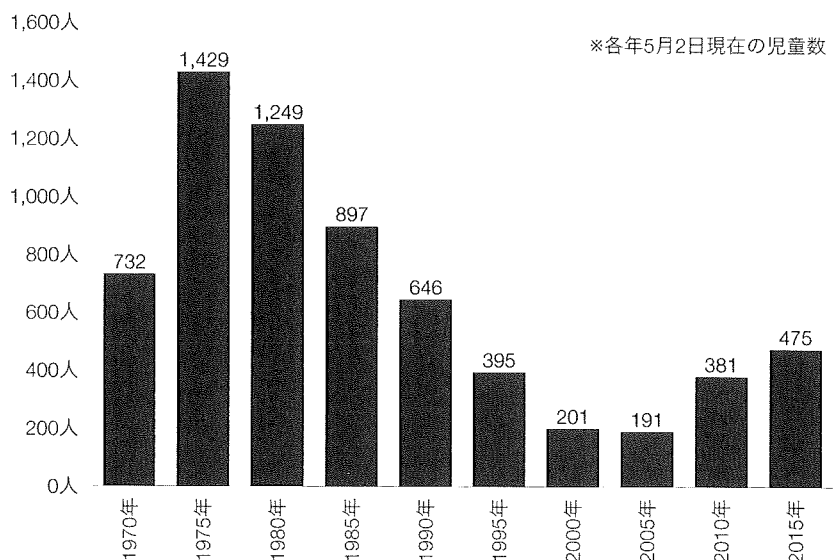


図2 東丘小学校の児童数の推移



写真1 最近の「ひがしまち街角広場」

し、新たなまちづくりを検討する上でのモデルとなることが期待^[2]されたからである。

「歩いて暮らせる街づくり事業」では、住民へのアンケート、ヒアリング、ワークショップが行われ、これらをふまえて「①多世代居住のための多様な住宅を」、「②学校をコミュニティの場へ」、「③近隣センターを生活サービス・交流拠点へ」、「④千里中央を生活・文化拠点へ」、「⑤公園を緑の交流拠点へ」、「⑥緑道を出会いのある交流空間に育てよう」、「⑦交流とまちづくりのための場と仕組みを育てよう」の「7つのまちづくり提案」がなされ、②③⑥は社会実験として取り組むことが提案された(山本ほか, 2001)。

このうち提案③に関わる社会実験として、近隣センターの空き店舗を活用して2001年にオープンしたのが、「ひがしまち街角広場」である。同じ2001年には、提案②を受け小学校の空き教室を活用したコミュニティ・ルームが開かれた。2002年からは提案⑥に関わることとして、歩行者専用道路を地域住民自らが清掃する「アダプト活動」が始められた(写真2)^[3]。

「7つのまちづくり提案」以外にも、2001年には地域新聞『ひがしおか』が創刊され、小学校児童の父親グループ「東丘ダディーズクラブ」が設立された。2002年からは、小学校の運動会と地域の運動会とが「東丘ふれあい運動会」として合同で開催されるようになった^[4]。

このように2000年頃の千里東町では、その後の地域のあり方に大きな影響を与える動きが相次いで生じている。「ひがしまち街角広場」は、こうした動きの1



写真2 新千里東町のアダプト活動



写真3 スタッフと来訪者がともに過ごす

つとして生まれた場所なのである。

2. 「まち」が居場所にもたらす課題

「ひがしまち街角広場」は地域と密接に関わって成立している。このことは同時に、「ひがしまち街角広場」は地域が抱える課題と無関係でないことを意味する。

現在「ひがしまち街角広場」で大きな課題になっているのは、スタッフの後継者

を見つけること、運営場所を確保することである。

◆スタッフの後継者

新千里東町は、千里ニュータウン12住区の中で唯一、戸建住宅がなく、全ての住戸が集合住宅で構成されている。そのため半世紀前のまち開きの際にも、近年の集合住宅の建替えの際にも、同じ世代の人々が一齐に入居する傾向があり、住民の年齢が特定の世代に偏っている。

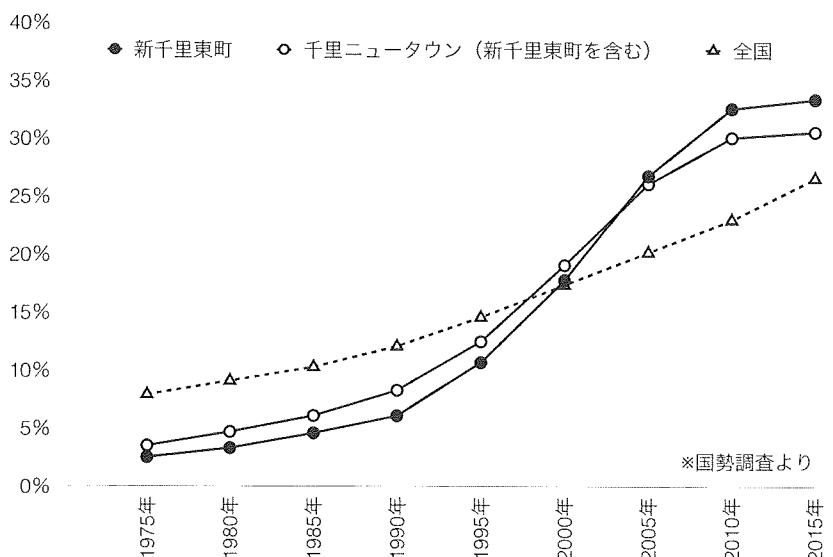


図3 新千里東町の高齢化率の推移

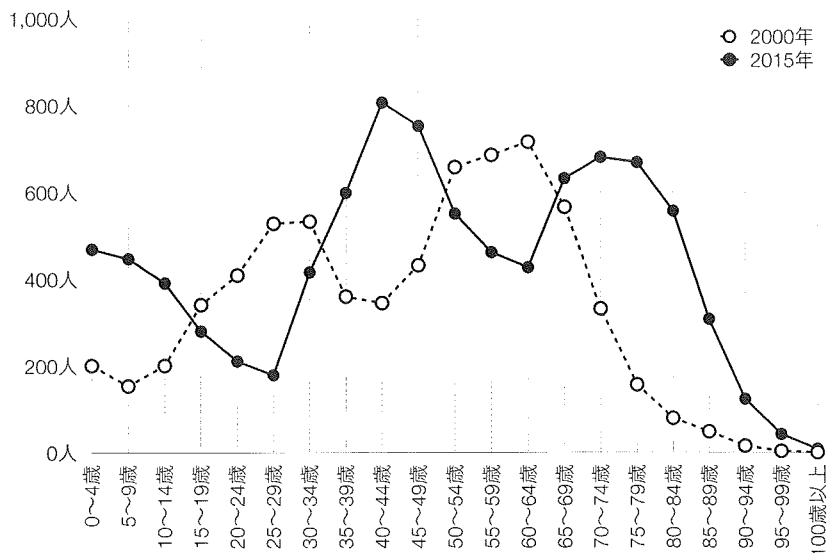


図4 新千里東町の住民の年齢構成

新千里東町の高齢化率は、入居当初は全国平均を下回っていたが、「ひがしまち街角広場」オープン前年の2000年には17.8%に上昇し、全国平均を上回るようになっていた(図3)。ただし第一世代^[5]の人々の中心は50~64歳であり、まだ定年を迎えていない男性も多かった(図4)。当時、ベッドタウンである千里ニュータウンにおける地域活動の主な担い手は、第一世代の女性だった。この時期にオープンした「ひがしまち街角広場」のスタッ

フ全員が女性である1つの要因はここにある。第一世代の女性は、千里ニュータウンでの半世紀にわたる暮らしを共有しており、このことが「ひがしまち街角広場」で主客の関係がサービスする側/される側に、完全に分かれていない緩やかな関係が築かれている背景になっていると考えることができる(写真3)。

「ひがしまち街角広場」の運営は、現在も第一世代の女性を中心となり担っている。2015年時点の新千里東町の高齢化率

は33.4%とさらに上昇し、第一世代の中心は70代になった。けれども、そのすぐ下の世代の人々は極端に少ない。次に人口が多いのは40代だが、共働きの夫婦が多い、ベッドタウンである千里ニュータウン内に仕事場がほとんどないなどの理由で、この世代の人々は昼間地域にいない。こうした地域の状況は、スタッフの後継者を見つけることを困難にしている大きな要因となっている。

◆運営場所

現在、新千里東町の近隣センター(写真4、5)は移転・建替の計画が進められている(図5)。移転・建替は「土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図り、周辺地域と調和の取れた良好な市街地環境を形成する」^[6]ことを目的に行われるもので、近隣センターがある土地(図5の西1地区)には分譲マンションが建設され、近隣センターの店舗は新千里東町の周辺部(図5の東地区)に移転する。集会所、郵便局、保育施設などが入る公共施設は分譲マンション脇(図5の西2地区)に建設される予定である。

近隣センターとは、千里ニュータウンにおいて地域の核となる場所で、歩いて



写真4 新千里東町近隣センター① (写真手前)



写真5 新千里東町近隣センター②



写真6 歩行者専用道路と近隣センター (正面の建物)